

富士見市立図書館 渋谷定輔文庫

渋谷定輔文庫

渋谷定輔文庫は、渋谷から一括寄贈された約5万点(図書・雑誌・新聞・文書・写真・遺品など)を収蔵しています。これは、渋谷の多岐にわたった活動から所蔵された資料群です。図書館の公園側の一角には渋谷定輔文庫コーナーが設けられ、著作、関係図書、写真パネル、またその時々テーマに沿って各種資料が展示されています。資料はネットで検索できますが、プリントされた目録類も置かれ、利用票に記入して閲覧することが出来ます。

資料のほとんどは閑架書庫に収められ、害虫駆除、殺菌のために順次燻蒸し大切に保存されています。

渋谷定輔生誕120年にあたり、図書館では児童書コーナー脇の大きな柱から始まり、柱ごとに渋谷のイラストが入った番号(1〜)をたどると、『野良に叫ぶ』からの詩が掲示されています。



図書館員作のはんこイラスト



渋谷定輔文庫の閲覧スペース

東中学校との交流

昭和54年(1979年)の東風祭では、渋谷も参加した南畑小作争議を題材とした創作劇「荒くれた手」が一年生により上演され、最優秀賞に選ばれました。

さらに昭和60年(1985年)、松形恭知先生と村山博子先生、富士見市在住の版画家小口益一氏の指導により、『野良に叫ぶ』の詩を題材とした版画が制作されました。これらの版画は、『農民哀史から六十年』各章の扉に掲載されています。

また版画の一部は、渋谷文庫で保存されています。



東中学校生徒の版画作品
(富士見市立中央図書館提供の写真より)

取材を終えて

・プチブルを捨て、渋谷黎子として駆け抜けた愛と革命の日々。文通から始まった純愛の歴史が胸に迫りました。

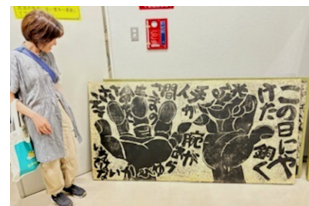
・南畑出身ですが、渋谷文庫は100年前の南畑の暮らしを知るきっかけとなりました。

・東中の生徒さんが共同で制作した大きな版画の現物は、圧巻でした。

・二酸化炭素による消火設備を備えた書庫で、約十二年かかり整理された貴重な資料は、大切に保存されていました。

・整理された資料が入る箱が棚にきちんと並び、図書、遺品などが収められた書庫。その資料の多さに驚きました。

(編集委員一同)



渋谷文庫所蔵の版画作品と編集委員。作品の大きさに驚きました。

コミセンホールにかかる大きな絵をご存じですか？

渋谷定輔 生誕 120 年

鶴瀬コミュニティセンターホールエントランスに入ると、正面にかかる絵「この風の音を聞かないか」をご覧ください。渋谷定輔・黎子夫妻を描いた大作です。今月号では富士見市上南畑に生まれ、今年生誕120年を迎える渋谷定輔について、ご紹介します。



F150号(縦1818mm×横2273mm)の大きな絵
作・寄贈：阿伊染徳美(鶴瀬公民館蔵)

この風の音を聞かないか

絵の上部は青を基調とした南畑の農村風景を背に、渋谷黎子(定輔の妻)が左手に詩集『野良に叫ぶ』を持ち、佇んでいます。中央左に描かれた茂る葉に埋もれて見える顔は、黎子が敬慕したローザ・ルクセンブルクでしょうか。下部にはベレー帽に眼鏡をかけた渋谷が本を読んでいる姿が描かれます。

阿伊染徳美氏により描かれ、昭和61年(1986年)に富士見市に寄贈されました。タイトルは、黎子没後一周忌(1935年)にまとめられた追悼集原稿をもとに発行された『この風の音を聞かないか』(1978年刊)によると推察されます。

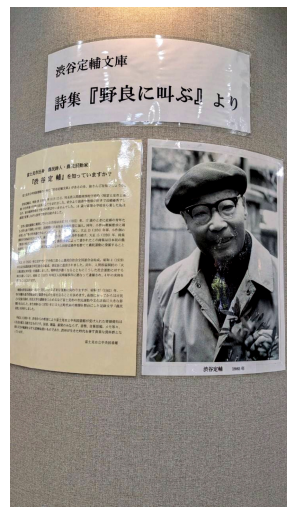
渋谷定輔(1905-1989)とは

渋谷定輔は、明治38年(1905年)富士見市上南畑の自作兼小作農家の長男に生まれました。厳しい農作業に従事する中から生まれた詩集『野良に叫ぶ』を21歳で発刊。同じ時期、今からちょうど100年前1925年5月から1926年12月まで、南畑の農家の暮らしと、渋谷の青春の日々を日記に綴ります。その日記をもとに昭和45年(1970年)『農民哀史』を刊行、昭和61年(1986年)には自らの生涯を話し言葉で振り返った岩波新書『農民哀史から六十年』を発刊します。

渋谷は、戦前は農民運動、戦後は様々な社会・文化活動を通じて、富士見市では市民大学講師を務めるなど、市民との交流を深めました。



第1回地域・自治シンポジウム(当時：教育・福祉・保健・地域を考えるシンポジウム)で講師を務める渋谷(1986年)(富士見市立中央図書館提供)



児童書コーナー脇の柱。図書館内を巡り、渋谷の生涯に思いを馳せてみませんか。